

* 受診するには *



1 手術した病院で組織を受け取る

手術で摘出した患者様のがん組織の残り(ホルマリン処理済み、またはパラフィン包埋ブロックになっているがん組織)を確保してください。自家がんワクチン作製には、がん組織量1.5g以上*が必要です。

※手術を受けた病院では、どこでも一定期間、患者様のがん組織をホルマリン漬けか、パラフィン包埋ブロック状態で保存しております。まずは患者様のがん組織が残っているか、手術を受けた病院にお問い合わせください。

*目安としては、小指の第一関節より先の大きさです。



2 提携医療機関で受診

①で受け取ったがん組織を持参の上、自家がんワクチン療法を受けられる医療機関を予約し、受診して下さい。この時自家がんワクチン療法の説明を受け、投与スケジュールを決めます。



3 ワクチンの投与

投与スケジュールに従い、外来受診にてワクチン投与を受けます。ワクチンは1回に5カ所、上腕に皮内注射します。

がんの手術を受けた方、
これから手術を受ける方のために

自家がんワクチン のご案内

無料相談に応じております
お気軽にご相談下さい

TEL:029-828-5591

全国の提携医療機関で受診できます。詳細はHPをご覧ください。

<http://www.cell-medicine.com>

自家がんワクチンとは
手術後のがんの再発・転移の予防
残存がんの治療を目的とした
科学的根拠に基づいた
がん免疫療法です。

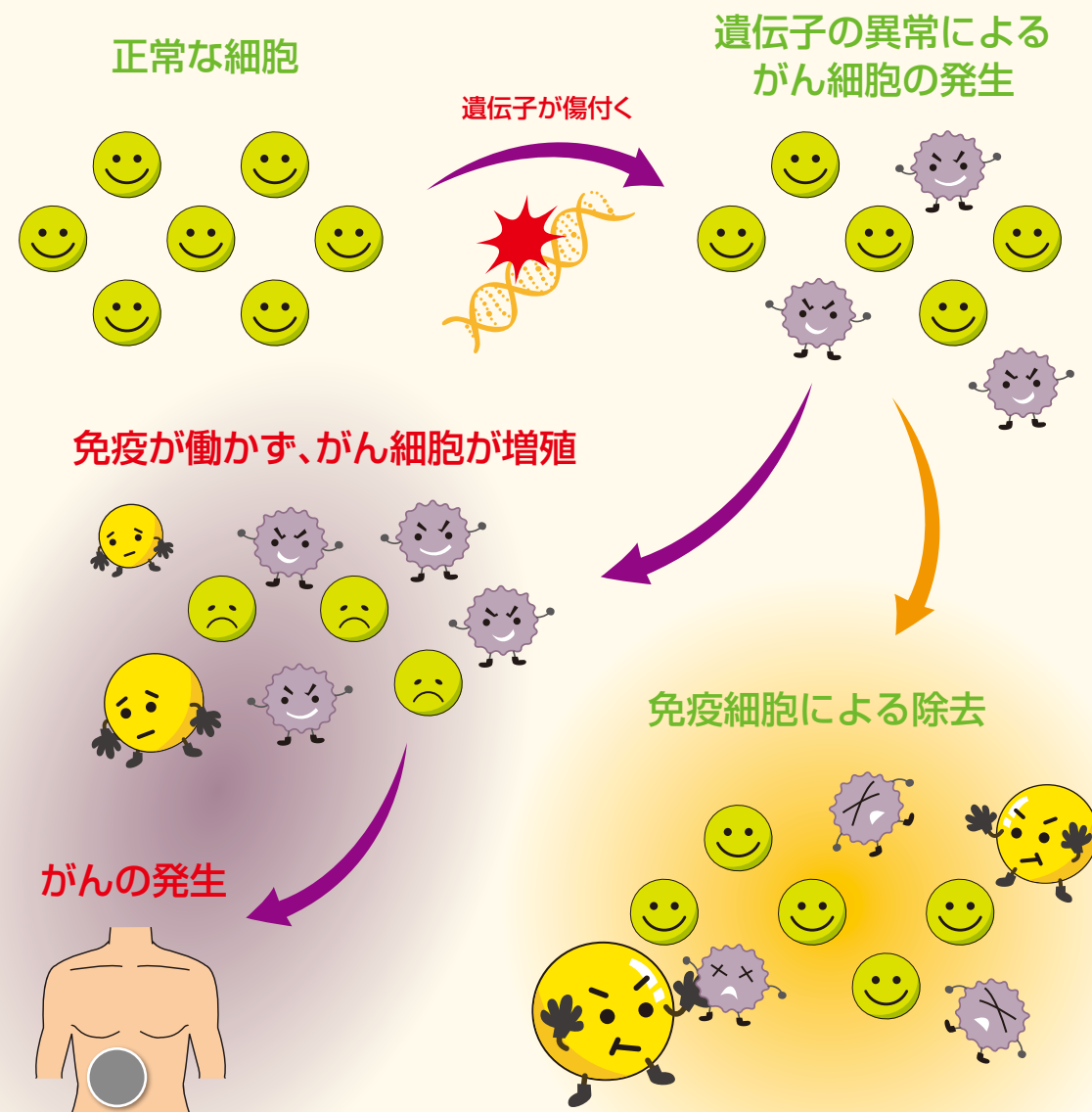
* がんとは？

人間のからだは多くの細胞で構成され、その細胞が毎日老化死滅と分裂増加を繰り返し、新しい細胞へと入れ替わっています。この新陳代謝をコントロールするために、身体の中の色々な組織がかかわり合っています。しかし、細胞分裂を行う過程で遺伝子が傷付き突然変異が起こると*、コントロールが効かなくなり必要としていない時でも細胞分裂が行われ、勝手に増殖し続けます。これが「腫瘍」といわれるものです。

*健康な人であっても、身体の中では毎日3,000個もの細胞が異常化し、がん組織ができていると考えられています。しかしこのほとんどは、大きながんの塊へと成長することはありません。身体の中で免疫細胞が「がんの芽」を摘み取ってくれているおかげです。

腫瘍は「良性」と「悪性」に分けられます。良性は命を脅かすことはほとんどありません。しかし、悪性腫瘍になると、急速に大きな塊となり、隣の組織へ浸潤したり、他臓器へ転移したり、手術で取り除いても再発したりして、結局は生命を脅かす病気となっていきます。

これがいわゆる「がん」です。



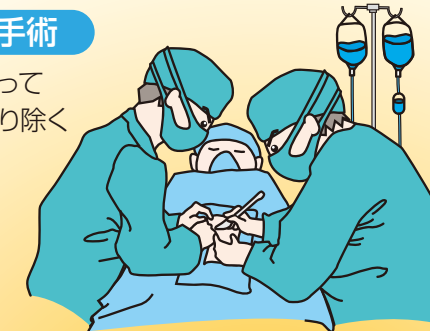
* がん治療について

外科手術は第一の選択で、がんは切って取ってしまうというのが原則です。しかし、手術ができない場合や転移・再発してしまった場合などは、症状に応じて、放射線療法・化学療法を行います。

これら「三大療法」の基盤となる治療法として注目されています。免疫療法とは、体内の免疫力を強化して「がん」を退治する事を目的とした最先端の治療法です。

外科手術

手術によって
がんを取り除く



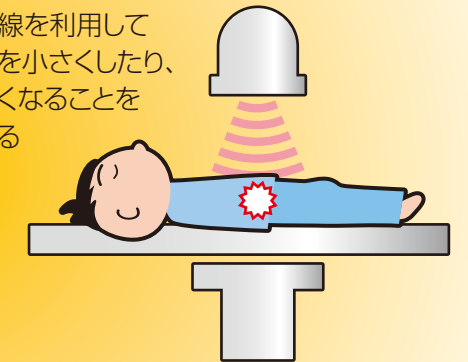
化学療法

薬によってがんを小さくしたり、
大きくなることを抑える



放射線療法

放射線を利用してがんを小さくしたり、
大きくなることを抑える



免疫療法

免疫を活性化させ、
がんを攻撃する



他治療との併用について

従来の考え方では、放射線療法や化学療法は免疫細胞を減少させてしまう為、免疫療法と併用する事は出来ないとされていました。しかし、最新の研究では、積極的にこれらの併用療法を行うことで良好な結果が得られるケースが増えています。

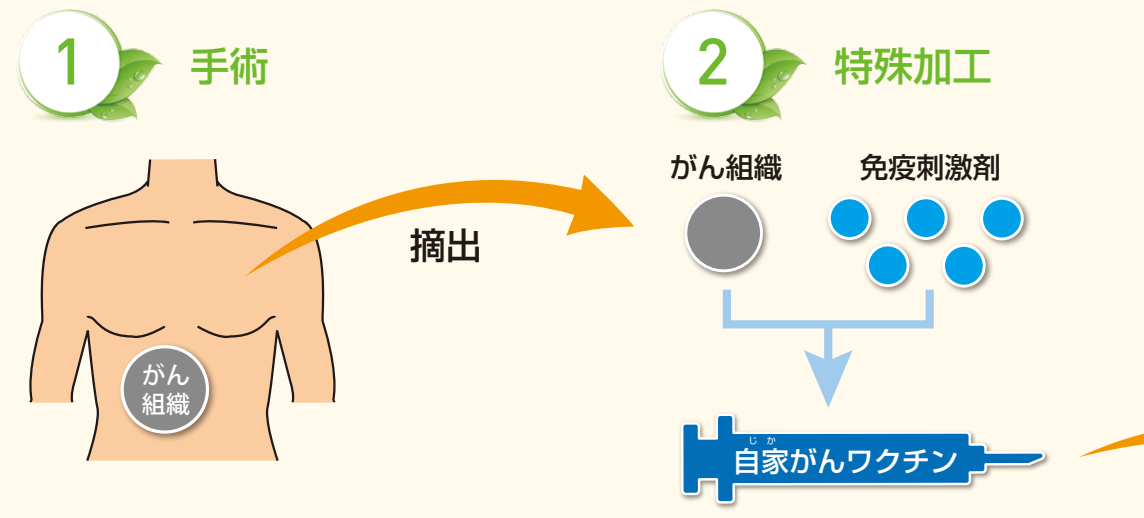
自家がんワクチンと他の治療法を併用する場合の詳細については、セルメディシン(株) (TEL: 029-828-5591)にお問い合わせ頂か、セルメディシン(株)のHP内の「よくあるご質問と回答」Q21などを参考にして下さい。

*最先端の免疫療法 – 自家がんワクチン –

免疫療法には様々なものがありますが、最先端のがんオーダーメイド治療の一つが自家がんワクチンです。

自家がんワクチンは、手術で取り出した患者様ご自身のがん組織とセルメディシン(株)独自の免疫刺激剤を混ぜて作る患者様ご本人だけの専用がんワクチンです。

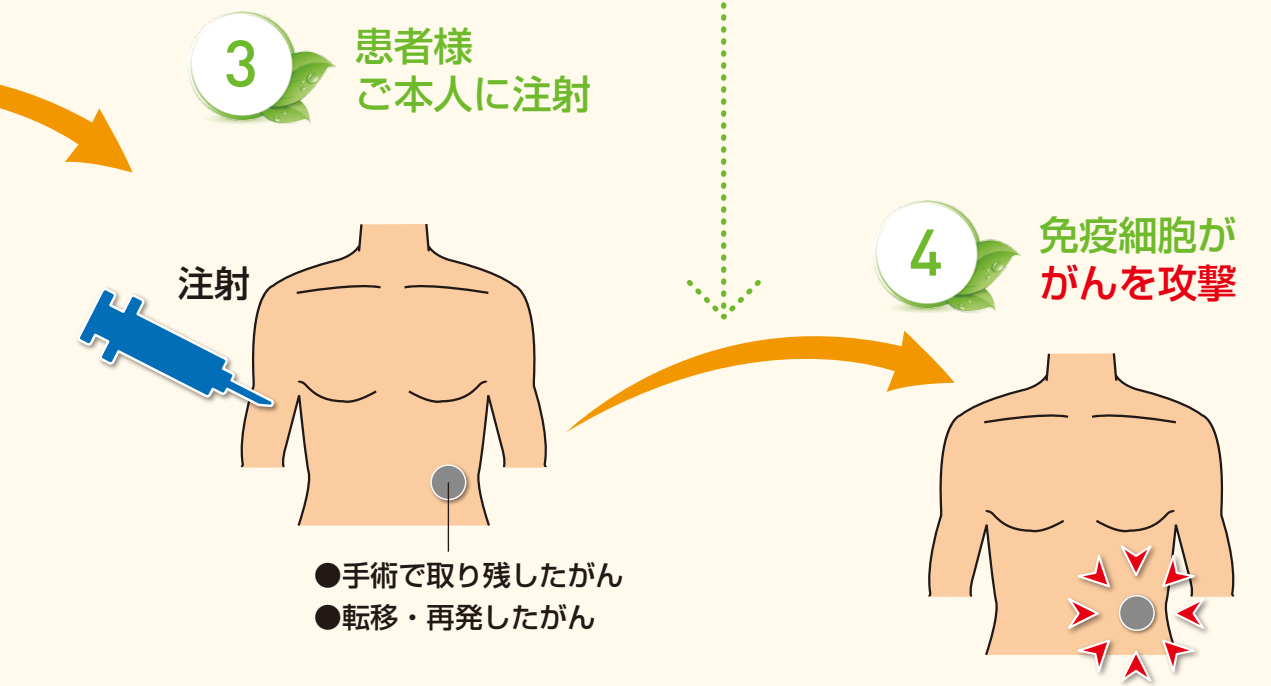
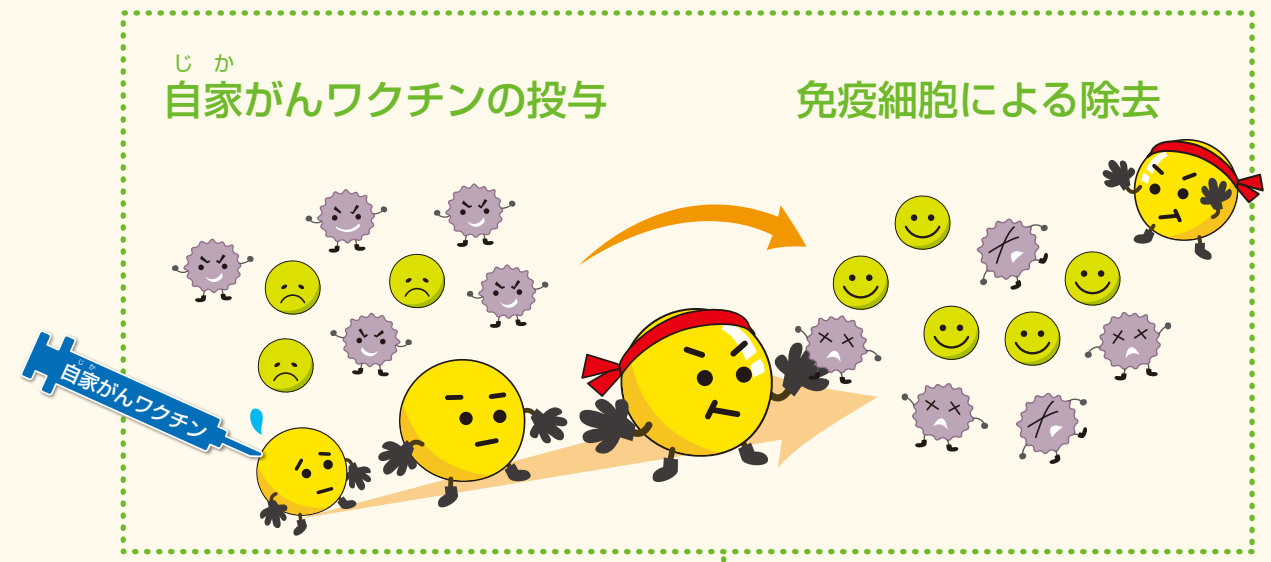
自分自身の組織が材料になるため自家がんワクチンと言います。



自家がんワクチン投与により、患者様ご本人の体内で、がん細胞だけを除去する免疫細胞を活性化することができます。

がん細胞には「がん抗原」といわれる、人の免疫細胞が「異常」と見なすことができる目印が含まれています。自家がんワクチンは、免疫細胞にこの「異常目印」を覚え込ませて、がん細胞だけを選択して攻撃するようにトレーニングします。いわば、がん細胞と闘う特殊部隊を体内で育成するのです。

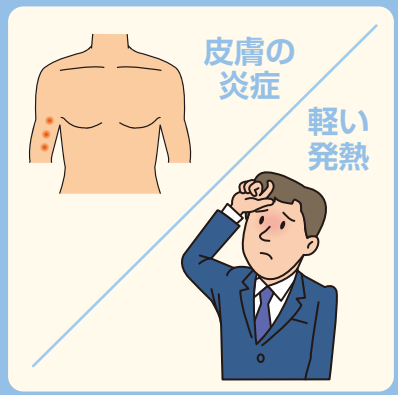
結果、がん細胞中に多く出来るがん抗原を免疫細胞が見つげ出し、活発にがん細胞を除去するようになります。これにより、手術で取り残した小さながんを除去する治療や、がんの再発・転移を予防することが出来るのです。



●問題となる副作用はありません

自家がんワクチンの作製には、ホルマリン処理により、増殖できなくなったがん組織を使用します。そのため、生きているがん細胞が含まれているという心配は全くありません。

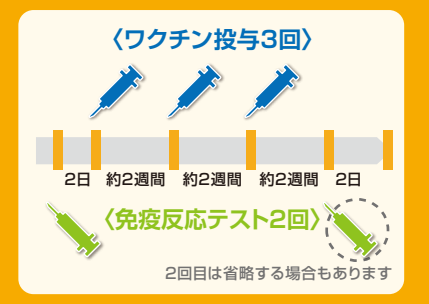
副作用は、注射部位の皮膚の炎症や、一過性の軽い発熱程度で、現在までのところ大きな問題となるものは報告されていません。



●入院の必要はなく、外来通院で投与可能です

自家がんワクチン療法を受けられる病院にて、外来通院で、計5回の注射を行います。(ワクチン3回・免疫反応テスト2回)

病院によっては、2回目の免疫反応テストを省略する場合があります。通常は2週間ごとに1回、上腕の皮内5ヶ所に、自家がんワクチンを注射します。全治療期間は約6週間となります。

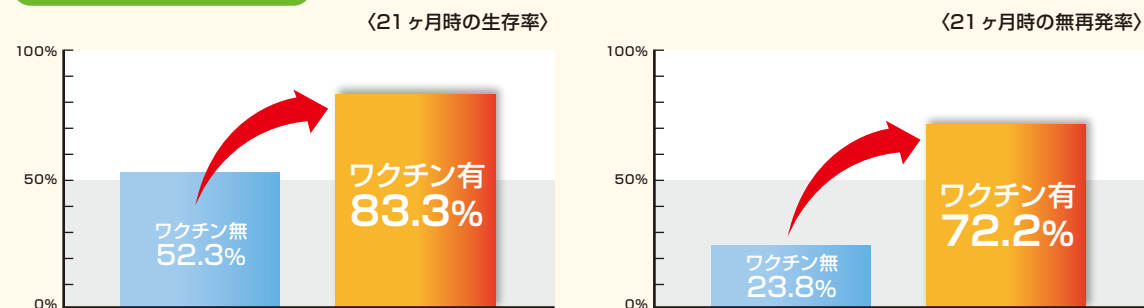


* 臨床試験成績

自家がんワクチン療法の基礎研究、臨床試験の結果を科学雑誌にて発表しています。肝臓がんでは、第II相後期臨床試験であるランダムイズドスタディで「再発リスク」が81%も激減し、世界的に権威あるアメリカ癌学会の臨床学術誌に、当社との共同研究論文が掲載されました。また大学病院と共同で行った脳腫瘍での治療成績も発表しています。

肝臓がん臨床試験

Ming Kuang et al. (2004) Clinical Cancer Research vol. 10 1574-1579



肝臓がんは手術で完治したはずでも、術後再発率が非常に高く、何もしなければ5年間で生存率が半分以下になります。自家がんワクチンによる肝臓がんの治療では、すでに術後再発を強く抑制している実績があります。

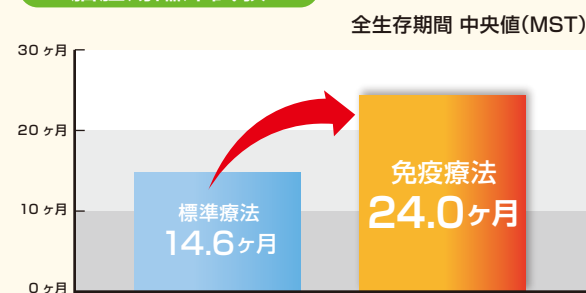
上図は、肝臓がん手術後21ヶ月経過時点の生存率・無再発率を、自家がんワクチン治療の有無で比較したものを表しています。

手術後21ヶ月経過時点で、がんを再発しなかった患者様の割合は、何もしなければ23.8%だったのに対し、自家がんワクチンを注射した患者様では、72.2%と非常に高い数値が確認されました。また、21ヶ月以上生存した患者様の割合は、何もしなければ52.3%だったのに対し、自家がんワクチンを注射した患者様では、83.3%でした。

これらの数値は、自家がんワクチンによってがんの再発が抑制され、延命効果があった事を示しています。

脳腫瘍臨床試験

Ishikawa et al. (2007) Cancer Science vol. 98 no. 8 1226-1233



脳腫瘍は、その悪性度によって、グレードI〜IVに分類されています。特にその中でもグレードIVの多型膠芽腫は、従来の治療法では、患者様の97%以上が5年以内に死亡しています。多型膠芽腫に対し、自家がんワクチンは左図に示すように、明瞭な治療効果が認められています。

日本では、2006年7月より、多型膠芽腫の標準的治療法として、初発患者に対し「手術+放射線治療+テモダール(抗がん剤)投与」が行われておりますが、全生存期間中央値(MST)は14.6ヶ月です。しかし、「手術+放射線治療+自家がんワクチン投与」を行うことで、再発患者を含む多型膠芽腫症例群において、全生存期間中央値(MST)が24ヶ月と大幅に伸びております。

その他の治療実績

これまでに自家がんワクチン療法を受診された、様々な種類のがんの治療実績が、セルメディシン(株)のHP内の「臨床効果」という項目でご覧頂けます。

(<http://www.cell-medicine.com/cases/report/whole.html>)

評価済み症例中の34.8%の症例で、臨床的に見てなんらかの改善効果が見出されております。

* 自家がんワクチンとその他免疫療法との比較

	自家がんワクチン	ペプチドワクチン	樹状細胞(DC)	活性化リンパ球
①がんへの特異性	特異的	特異的	特異的	非特異的
②抗原の種類	ホルマリン処理組織(全てカバー)	人工抗原(一部カバー)	人工抗原(一部カバー) または 生組織(全てカバー)	抗原を使用しない
③投与の回数	原則1コース [ワクチン3回・テスト2回]	繰り返し	繰り返し	繰り返し

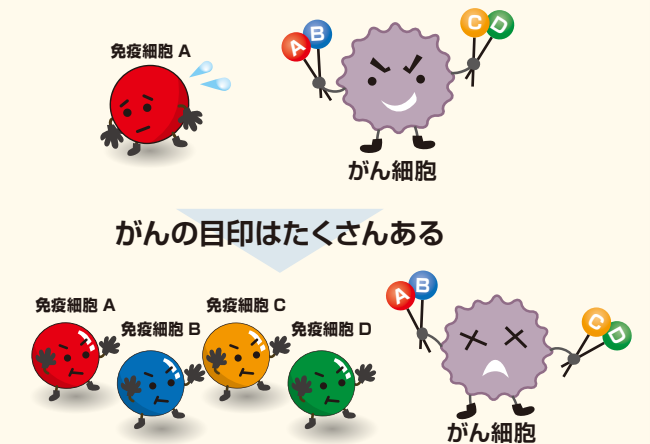
①がんへの特異性

がんへの特異性を持つ「特異的がん免疫療法」と呼ばれる治療法では、正常な細胞には発現せず、がん細胞のみに特異的に発現する「がん抗原」と呼ばれる目印を標的にすることで、がん細胞だけを退治してくれる免疫細胞を集中的に増強させます。

②抗原の種類

がんの特異的に発現している「がん抗原」として、現在75種類以上のペプチド(目印)が報告されています(Clin Cancer Res 2009; 15(17): 5323-37)。実際に体内で免疫細胞の目印になるペプチドは、一つのがん抗原の中に複数個存在すると考えられています。患者様それぞれのがんには多数のがん抗原があるので、膨大な種類の目印が存在する事になります。

ペプチドワクチンにおいては、これらのがん抗原の中でも有効性、汎用性が高い数種類のペプチドが人工合成され、用いられます。自家がんワクチンにおいては、患者様から手術で摘出されたがん組織をそのまま抗原として用いる為、これらの目印がほぼ全て含まれた治療を行う事が出来ます。



③投与の回数

自家がんワクチン療法は、左ページに示した臨床試験において、1コース(ワクチン投与3回、免疫反応テスト2回)投与での有効性が実証されています。その為、他の免疫療法とは異なり、繰り返し投与を行わず、原則として1コースにて治療を終了します。

価格については、初診、1コース分のワクチン投与、2回の免疫反応テストと判定を全て含めて150万円前後です(自家がんワクチン療法は自由診療のため、病院・クリニックごとに価格が異なります)。他の免疫療法、例えば免疫細胞療法では、1回20万円だとしても繰り返し投与が多く、12回繰り返せば240万円となります。自家がんワクチン療法は、治療に長い時間をかけて繰り返し投与する必要はありませんので、相対的には低価格の治療となります。

自家がんワクチンの場合

原則1コースで終了

免疫細胞療法の場合

繰り返し投与